

01	名古屋	中根小学校	タナカ ユウマ 名前 田 中 裕 間
分科会番号	11	分科会名	保健体育（体育）

研究題目 自ら学びを調整し、技能を高める児童が育つ体育学習

研究要項

1 どのような児童を育てたいか。

私は、体育の学習を通して、自ら学びを調整し、技能を高めることができる児童を育てたい。私の考える学びを調整する姿とは、学習状況を把握し、技能の実態に合った課題を設定したり、根拠を明確にして学び方を自己決定したりして、目的意識をもって学習に取り組む姿である。

「ナゴヤ学びのコンパス」には、重視したい学びの姿の一つとして、「自分に合ったペースや方法で学ぶ」ことが挙げられており、児童が学習の状況を振り返り、調整しながら学習を進めていくことが大切だと述べられている。これは、私の考える、学びを調整する姿にもつながる。学びを調整することを積み重ねることで、自律して学び続ける力の素地を養うことができ、今後現れる別の課題に対しても、主体的に取り組むことができると考える。

2 学年・領域（単元）

- (1) 学年 第5学年
- (2) 領域（単元） 器械運動（マット運動）

3 授業づくりにおける基本的な考え方

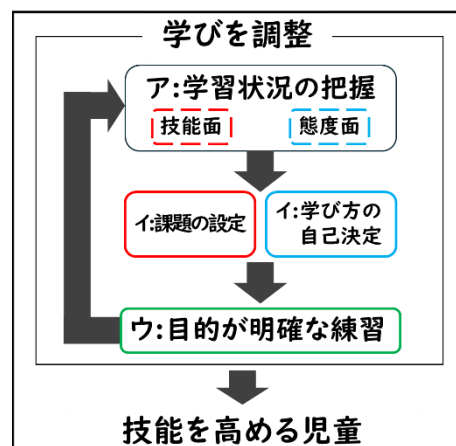
- (1) 単元末に期待される具体的な児童の姿

自らの学習状況を把握した上で、技能の実態に合った課題を設定し、それを解決するための練習方法や練習の場を選び、目的意識をもって練習することで技能を高める姿。

- (2) 単元末に期待される具体的な児童の姿に迫るための授業の考え方

児童が自ら学びを調整するためには、まず、自らの学習状況を把握することが大切である。把握すべきことは二つあると考える。一つ目は技能面である。評価活動を通して、動きの出来栄を把握できるようにする。二つ目は態度面である。選んだ練習方法や練習の場で、どのように学んだのかを振り返ることで、次時の学び方に生かせるようにする。次に、自らの技能の実態に合った課題を設定したら、その課題を解決するための練習方法や練習の場などの学び方を自己決定する。そして、目的が明確な練習に取り組むことで、目的意識をもって課題解決に向けた練習ができるようにする。

このように、本実践では、「ア:学習状況の把握→イ:課題の設定、学び方の自己決定→ウ:目的が明確な練習」を基本的な学習の流れとして、これを繰り返すことで、自ら学びを調整し、技能を高めることができる児童の育成を目指す【資料1】。これらを基本的な考え方として、次の点を重点に実践に取り組む。



【資料1 基本的な考え】

- 自ら学びを調整できるようにするための学習環境の工夫

(3) 授業の具体

【自ら学びを調整できるようにするための学習環境の工夫】

ア 学習状況の把握

学習状況を把握するために、技能面での技の完成度チェックと態度面での学び方の振り返りを、それぞれ資料2や資料3内の【技の完成度チェック表】と【学び方の振り返り】を学習カードに記載して行う。技の完成度チェックでは、ペアでの評価活動を行い、教師が設定した評価基準をもとに、技のレベル（A～C）を判定する。また、系統性の観点から、扱う技を「○：基本・◎：発展」としたり、レベルAまで到達すれば次の技に取り組めるようにしたりすることで、段階的に技に挑戦できるようにする。こうして、自己の技能の実態を把握することで、適切な課題の設定につなげる。学び方の振り返りでは、選んだ練習方法や練習の場で、どのように学んだのかを技能面と照らし合わせて振り返ることで、次時の学び方の選択に生かせるようにする。

イ 課題の設定、学び方の自己決定

前時の学習状況の把握（技の完成度チェック、学び方の振り返り）をもとに、課題（取り組む技）の設定と、学び方の自己決定（今日の学び方）をする。

課題の設定では、例えば、前時の評価活動で、開脚前転レベルBだった児童は、「開脚前転」が課題となる。自分のめあてには、課題と意識したいことを書かせる【資料2】。

学び方の自己決定では、前時の振り返りを生かして、練習方法と練習の場をそれぞれの選択肢の中から選ばせる。例えば、前時に赤白玉はさみの練習を通して、足を開くタイミングが早いことが分かった児童は、まだ動きのこつをつかんでいないため、本時も同じ練習に取り組むことになる【資料3】。

このように、前時の学習を踏まえて、技能の実態に合った課題の設定や根拠を明確にした学び方の自己決定ができるようにする。

【技の完成度チェック表】 仲間と動きを見合い、技の完成度を確認しよう。		
技 Lv	○開きやく前転	◎伸しつ前転(けいしゃつきのマット)
C	☒ 立つことができない	☐ 立つことができない
B	☒ ひざが曲がった状態で立てる	☐ ひざが曲がった状態で立てる
A	☐ ひざがのびた状態で立てる	☐ ひざがのびた状態で立てる

↓

【自分のめあて】 開きやく前転で、マットに着く直前に足を開いて立てるようにする。

【資料2 課題の設定をする流れ(例)】

【学び方の振り返り】	
今日の 学び方(練習方法・練習の場) を振り返って、次回の学び方へつなげましょう。	
今日の授業では、赤白玉はさみの練習をくりかえし行い、足を開く タイミングが早いということが分かったから、 次の授業では(も)、赤白玉はさみの練習を続けて行い、自分の体よりも 前に赤白玉が落ちるようにをしたいと思います。	

↓

【今日の学び方】	
練習方法 繰り返し練習 動画を撮って練習 仲間からアドバイスをもらう 先生からアドバイスをもらう	練習の場 傾斜を利用した場 ラインつきマット 段差を利用した場 赤白玉はさみ ボール頭突き
回転の勢いがつきやすい 立ちやすい 足を直前に開く意識 前傾姿勢	

【資料3 学び方の自己決定をする流れ(例)】

ウ 目的が明確な練習

目的意識をもって練習に取り組めるようにするために、それぞれの練習の場がどのような動きを目的としているのかを図と言葉で表記する【資料4】。

練習の場			
＜傾斜を利用した場＞ 回転の勢いがつきやすい	ラインつきマット 立ちやすい	＜段差を利用した場＞ 足を直前に開く意識	赤白玉はさみ 前傾姿勢

【資料4 目的を明確にした練習の場（前転グループの例）】

(4) 指導と評価の計画

単元目標		知識及び技能	マット運動の行い方を理解するとともに、回転系の基本的な技を安定して行ったり、その発展技を行ったりすることができるようにする。								
		思考力、判断力、表現力等	自己の技能の実態に合った課題を設定し、その解決に適した練習方法や練習の場を考えることができるようにする。								
		学びに向かう力、人間性	約束を守り、場や用具の安全に気を配ったり、課題解決に向けて粘り強く取り組んだりすることができるようにする。								
		1	2	3	4	5	6	7	8		
学習過程	10 20 30 40	モチベーション	集合・整列、あいさつ、準備運動								発表会
		① 課題の設定・学び方の自己決定									
		基礎的な動き、感覚づくり									
		基礎的な動き 感覚づくり									
		動きのポイントの確認	ウ 目的が明確な練習	動きのポイントの確認 試しの運動	ウ 目的が明確な練習	動きのポイントの確認 試しの運動	ウ 目的が明確な練習	ウ 目的が明確な練習			
		試しの運動	前転グループ	後転グループ	はね起き	すべてのグループの中から課題を選ぶ					
		ア 学習状況の把握									
		片付け、次時の確認、整理運動									
評価機会	知	①		①		①			総括的な 評価		
	技		①		②③	④					
	思	①	②	①	②	①	①②	①②			
	態	①					②	②			
単元の評価規準	知	① マット運動の基本的な技や発展技の動きのポイントを言ったり、書いたりしている。									
	技	① 膝が伸びた状態で大きく開脚し、開脚前転を安定して行うことができる。 ② 膝が伸びた状態で大きく開脚し、開脚後転を安定して行うことができる。 ③ 膝が伸びた状態で体を屈曲し、伸膝後転を行うことができる。 ④ 両手をマットに着手し、体をアーチ型にすることを意識しながら頭のはね起きを行うことができる。									
	思	① 評価活動を通して、自己の技能の実態を適切に捉えている。 ② 課題を解決するための練習方法や練習の場を適切に選んで運動に取り組んでいる。									
	態	① 約束を守り、場や用具の安全に気を配っている。 ② 課題解決に向けて、粘り強く取り組んでいる。									

4 児童の学びの過程

抽出児童の実態（知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度）

A児（◎・○・◎）技能面ではクラスの中でも上位。仲間と共に学び合おうとする姿が見られる。

B児（○・○・○）運動は好きだが、マット運動には苦手意識がある。後転で着手ができない。

C児（△・○・△）運動全般が苦手。回転の勢いが足りず、後転ができない。

第1・2時 前転グループの技に取り組む。

第1時では、示範動画を見せて、前転グループの技を紹介した。学習カードには、技のポイント一覧（前転グループ）【資料5】として、それぞれの技を成功させるために意識するとよいことを記し、全体で共有した。練習方法では、ほとんどの児童が「仲間からアドバイスをもらう」を選択しており、「先生からアドバイスをもらう」を選択した児童は、30人中4～5人であった。



【資料5 技のポイント一覧（前転グループ）】

開脚前転では、レベルBの「膝が曲がった状態で立てる」児童が学級全体の半数程度であった。

第2時では、基礎的な動き・感覚づくりとして、開脚するゆりかごを行った。マットに着く直前に足を開くことを伝えて、何度も行った。伸膝前転の練習に取り組んでいたA児が、「もっと回転の勢いを強くしたい」と、教師に訴えかけてきた。そこでA児に、「ラバーラインをもっと遠くに置いてみたら」と、提案をした。回転の勢いに着目して練習の場を工夫したA児は、見事に伸膝前転を成功させることができた。

第3・4時 後転グループの技に取り組む。

第3時からは、後転グループの技に取り組んだ。後転ができない児童が、7～8人いたため、基礎的な動き・感覚づくりでは、着手するゆりかごと足を遠くに着くゆりかごを中心に行った。B児とC児の様子を見ると、B児は左手がうまく着けていなかった【資料6】。また、C児は足を着けることができていなかった。その状況を二人に伝えたが、その後の練習でも改善されなかった。C児の学び方の振り返りには、「先生から回転の勢いが足りないとアドバイスをされたから、次の授業では回転の勢いがつけられる傾斜付きのマットや、ライン付きのマットの場で繰り返し練習をしたい。」との記述があった。



【資料6 第3時のB児の様子】

第4時では、B児は自分の左手の形を確かめるため、動画を撮って練習する方法を選んでいった。左手の手のひらがマットに着いていないことを確認し、それが体が左側に倒れてしまうことの原因となっていることに気付いていた。C児は前時の振り返りを生かして、繰り返し開脚後転の練習に取り組んでいた。マットにラバーラインを置き、それより奥に尻を着ける動きができるようになると、少しずつ距離を遠くして回転の勢いを強めようとする姿が見られた【資料7】。

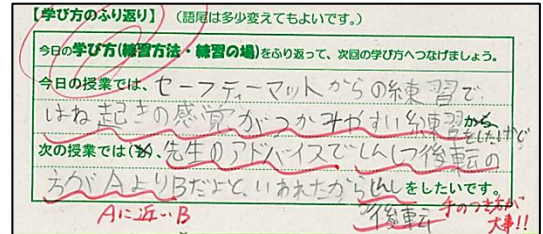


【資料7 第4時のC児の様子】

そして、見事に開脚後転を成功させることができた。

第6・7時 自己の技能の実態に合った課題に取り組む。

第6時から、これまでの学習を振り返り、自己の技能の実態に合った課題を設定することとした。B児は開脚後転はレベルAであったため、伸膝後転を課題とすると思われたが、頭はね起きを課題として設定していた。理由を聞くと、「伸膝後転はレベルAを一回取れたから、別の技に取り組もうと思った」と話した。このことから、B児は技の完成度を高めることよりも、できる技を増やすことに意識を向けていることが分かった。授業の様子を見て、頭はね起きを成功させるにはまだ時間が掛かると感じたため、B児に、「まずは伸膝後転の完成度を高めてみてはどうか」と提案をした。すると、B児の学習カードの振り返りには、課題を修正しようとする記述が見られた【資料8】。B児と同様に、課題の設定が自己の技能の実態と離れていると感じた児童に対しては、学習カードに教師からのコメントを書くことで課題の修正を促した。学び方の振り返りでは、ほとんどの児童が根拠を明確にして、次時の学び方を考えることができた。



【資料8 B児の学習カードの記述】

第7時では、自分のめあてに、すべての児童が取り組みたい技と気を付けたいことを明確に書くことができていた。練習方法の自己決定では、学級全体の傾向として、「先生からアドバイスをもらう」を選択する児童が毎時間増えてきており、この時間には10人ほどになっていた。技を成功させるためには、できない原因を見付けることが大切だと感じ、教師からのアドバイスに頼ろうとしている様子が伝わってきた。そのような児童には積極的に関わることで、一人ひとりの動きに合ったアドバイスをしたり、おススメの練習を提案したりしていた。C児は開脚後転を成功させていたため、技の完成度チェックでまだレベルBしか取れていない伸膝後転を課題として設定した。これまでと同様、回転の勢いに意識を向けた練習をしていく中で、足を広げて立ってしまっていることに気付き、同じ場所で練習をしていた仲間から、「赤白玉を足に挟んでやってみたら」と声を掛けられ、新たに練習に取り入れていた【資料9】。すると、授業の終盤には、平らなマットで見事に伸膝後転を成功させられるようになっていた。



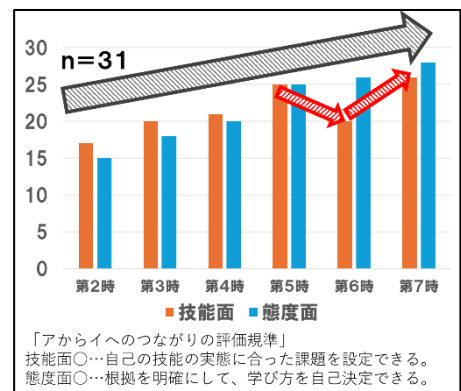
【資料9 第7時のC児の様子】

5 まとめ

(1) 結果と考察

○ 自ら学びを調整できるようにするための学習環境の工夫

まず、「ア:学習状況の把握」から、「イ:課題の設定、学び方の自己決定」へのつながりが見られた児童の人数の変化を集計した【資料10】。第2時からどちらも増加したが、第6時で技能面だけが減少した。これは技の完成度を高めることに意識を向けられていなかった児童がいたことが要因として考えられる。動きのこつをつかみ、何度やっても技を成功させられることこそが、技が身に付いた状態であるということを確認して、評価活動を行う必要があると感じた。また、学び方の自己



【資料10 アからイへのつながりが見られた児童の人数の変化】

決定では、学習カードの振り返りに対して、教師が動きのこつに着目できるような視点を与えたり、他者をつなげるような声掛けをしたりしたことが、児童の学び方の自己決定を支えるために有効であったと考える。

次に、各技の評価規準を達成した児童の人数を、単元前半（2・4・6時）と単元後半（8時）でそれぞれ集計した【資料 11】。どの技も単元が進むにつれて、技能を高めることができた人数が増加したことが分かった。学びの調整に加え、児童の技能の実態に応じた基礎的な動き・感覚づくりを繰り返し行ったことが、技能の高まりにつながったと考える。

n=31	① 開脚 前転	② 開脚 後転	③ 伸膝 後転	④ 頭はね 起き
前半 (2・4・6時)	18 ↓+4	19 ↓+7	6 ↓+3	1 ↓+3
後半 (8時)	22	26	9	4

【資料 11】 各技の評価規準を達成した児童の人数

さらに、学びの調整と技能の高まりについて、評価規準を基に○と△で評価し、クロス集計した【資料 12】。31人中 24 人が、「学びの調整○・技能の高まり○(A群)」であることから、多くの児童が学びの調整を経て、技能を高めることができたと考える。技能面では、自己の技能の実態に合った課題に取り組み続けたことや、自分に必要な動きを意識することができる目的が明確な練習に繰り返し取り組んだことが、技能の高まりにつながったと考える。態度面では、学び方について自己決定を繰り返したことで、自分で考えて練習をする習慣が身に付いたと考える。「学びの調整○・技能の高まり△(B群)」は、4 人であった。技を成功させられず、練習に行き詰まりを感じた場合には、より詳しい技能分析ができる環境を整える必要があったと考える。技のどの局面に原因があるかを教師が把握した上で、視点をもたせる発問をしたり他者をつなげたりする支援が必要であると感じた。「学びの調整△・技能の高まり○(C群)」は 2 人、「学びの調整△・技能の高まり△(D群)」は 1 人であった。どちらも学びの調整ができておらず、特に学習状況の把握に原因がある様子であった。技能面では、評価活動が適切にできていない児童には、教師による評価を踏まえた声掛けをすることで、技能の実態を正確に把握させることが大切であると感じた。態度面では、他者の学び方を紹介することで、それぞれの学び方の良さを共有できるような支援をすることが大切であると感じた。

技能の高まり			
学びの調整	n=31	○	△
	○	24 (A)	4 (B)
	△	2 (C)	1 (D)
「評価規準」 学びの調整○…アからイへのつながりが半数（12分の6）以上見られた児童 技能の高まり○…取り組んだ技のうち、技能の高まりが半数以上見られた児童			

【資料 12】 学びの調整と技能の高まりのクロス集計

(2) 今後の課題

実践後のアンケートには、「自分で考えて取り組めたことで、新たな発見があった」「自分に合った学び方が見付かった」「仲間にアドバイスをしたことで自分自身の理解も深まった」など、学びを調整することで実感したことが感想に書かれていた。一方で、学びを調整できなかったり、技能を高められなかったりする児童も一定数いた。児童に何をどの程度委ねるのか、もし学びの方向性がずれてしまったり停滞してしまったりした場合、どのような支援をするのかなど、様々な想定をしておくことで、児童一人ひとりの学びに寄り添った柔軟な支援ができるのではないかと感じた。そして何よりも、授業を展開する過程で、教師が児童の学習状況を的確に把握しておくことが、個に応じた適切な支援につながるのだと改めて実感した。そのような視点を大切にして、今後の授業づくりをしていきたい。